

RIST30周年に思うこと

RISTシニア会員
崇城大学 元教授
八坂 三夫



RISTとの関わりは、30数年前、熊本県Uターン支援事業が発足間もない頃、Uターンアドバイザーにお世話頂き、県誘致企業の東京カソード研究所（以下、TCL）の九州事業所開設時に大阪よりUターン入社しました。数年後にRISTが創立され、TCL九州事業所の県OBで初代所長の内田文義氏より県事業には積極的に参加せよとRIST担当者に任命されてからになります。

TCL在職中には、イブニングスクール、研究会への参加、企業紹介、技術交流会での座長等に関わり、RISTで得た人的ネットワークにより、電子応用機械技術研究所の萩原宗明氏との共同研究、地域結集型共同研究事業へ参加させて頂きました。

そして、50歳を過ぎて教職へ転身、大牟田の有明工業高等専門学校の電子情報工学科教授、地域共同テクノセンター長として産学官連携の有明広域産業技術振興会に関わり、RISTで得た知識、経験が大いに役立ちましたが、地域企業との温度差を感じたのも事実です。

その後、崇城大学へ工学部教授として異動、RIST幹事を務めさせて頂きましたが、家庭の事情により定年前に退職した後、非常勤として産業技術総合研究所の客員研究員を務め、有明高専、崇城大学、産総研のそれぞれの立場で産との共同研究に関わらせて頂きました。

結果として、Uターン以降の私の技術者人生ほとんどの約30年間に、RISTを中軸として曲がりなりにも産学官一連の立場を経験させて頂いたこととなります。この間の大中小企業との関わりから、ビジネス、研究開発における大企業と中小企業との優劣の差は、資金力は勿論、組織力により得られる情報

量の圧倒的な差に起因していると思い、この差を埋めることが地域振興を図る産学官連携の大きな役割の一つとして機能していることを認識することが重要であると常々感じておりましたが、県産業技術センター前所長の柏木正弘氏は、「企業の垣根を超え知恵を触発・創造・流通させる技術者コミュニティの構築こそが、産官学が機能し、成果をもたらす礎、地域の産業振興の自律的にして究極的な解」と述べられています。正に同感、最重要との認識に共感致すところです。

2010年代に入り、AI(人工知能)がディープラーニングのブレークスルーにより急速に発展して、これから「特化型AI」から「汎用型AI」へと進化することから、ICT、IoTがもたらす社会、ビジネス(BRMS活用など)、技術環境変化は大きく、企業でも個人でも、AI活用の能否によって、様々な局面で格差が開くと考えられており、情報獲得の俊敏性への要求は更に増すことは必至でしょう。

つまり、RISTの一つの機能として技術者コミュニティが異分野との情報交流による自己啓発の場であることは勿論、気づきの場として今まで以上に、益々、進化・深化することを(特に若手技術者に)期待致します。

昔のことですが、熊本城の下の会場で行われていた頃の技術交流会では懇親会にも学生が参加していました。技術発表で質問された学生が、懇親会が始まるとすぐに私のところに来て、今回は上手く説明できなかったが、次回は絶対に納得させますと酒を交わしながら語る顔を思い出します。

このようなことも技術者コミュニティ構築の入り口として必要ではないでしょうか。